

名前とアイデンティティ

高田 夏子

I. はじめに

子どもは1歳前後になると、自分の名前を呼ばれて手を挙げるということができるようになる。簡単なように思えるが、自分の名前が自分のことを表していると理解するには、自他の区別や自分を対象として客観的にみる能力が育っていることが必要である（武藤他 1990）。自分の名前は自分を周囲から区別させる機能がある。

またその反対に、名前が自分というものを決めていくということも言える。「自己を名前という記号で代表させることによって、未だ不安定な自己性という実体を限定し、自己性の感覚や意識を強化していくということである。その意味で、子どもに名前をつけ、その名前で呼ぶという親のネーミングは、子どもの自己に実体性や限定を与えていく役割を果たしている。また自己名をネーミングする（される）ことが、自己の領域を意識させ、世界の中心としての自己性を強めていく」（武藤他 1990）。自と他が分化しているから名前を持つという面と、名前を呼ばれるからその意味するものになっていくという面がある。

この名前というものは、自分は何かというアイデンティティの問題ともいうことができる。日本の武士の社会に見られたように、親から与えられた幼名を、大人になるときに成人の名前に替えるという文化も少なくない。これは、大人になるという内面的な移行を、名前を替えることで助けているといえる。名前を単に呼び名としてだけでなく、内的なアイデンティティとの関連でとらえてみるのが興味深く思われたので、発達の順を追ってまとめてみたい。

II. 乳児とアイデンティティ

自分の名前ということに先立つ自分という感覚は、いつごろどのようにできてくるのだろうか。自分という感覚、つまりアイデンティティの感覚は、発達の早期から母親との関係の中で形成されていくプロセスであるといわれている。エリクソンによれば、早期の自我発達の心理・社会的危機は、「基本的信頼対不信」である。世界に対する信頼や不信が子どもの中に育ち、それは他者への、また自分自身への信頼や不信とも関係していくといえる。母親が子どもの要求を読みとり満たす共感力が、子どもにとって信頼の経験となり、これがずれてしまうことが不信の経験となり、これらの経験が積み重なることで信頼や不信感が育っていくのだろう。信頼の経験の大切さは言うまでもないことだが、不信の経験となるズレは、自分という感覚が育ってくることに一役買っているのではないとも言われている。「自と他の分離や分化へ促進的に働いている経験の機能」であるという（鏞 1994）。

乳児の自己は早期の母子関係の融合から分化してくると考えられてきたが、乳児期の子どもと母親の直接観察を通しての研究などで、乳児の自己は初めから分化しており、それが対人関係の中で成熟発展すると考えられるようになってきた（スターン, D. 1989）。鏞（1994）はスターンの述べる4つの自己感のうち、中核自己感に注目し、これがアイデンティティ論の中核的なテーマと同じであると述べている。それは、自己の行為のシナリオライターは自分であるという「自己発動性」、自分の行為には境界があり身体的に断片化していないという「自己一貫性」、自己体験と特徴的な行動パターンを体験する「自己情動性」、時間の流れにおける連続性としての「自己歴史性」である。人とのやりとりが刺激となって、これらの自分という感覚の基礎がはっきりしてくる。自己感覚と他者感覚は同時にできあがってくるようである。「共にある」ということに重要性があるという（鏞 1994）。この言葉からは「二人居るから一人になれる」というウィニコットの主張も思い出される。一人で個として

の一人になるのではなく、二人居るから自分も感じられるようになる。宇宙の中にポツンと一人で浮かんでいては、自分であるということも感じることはないだろう。

Ⅲ. 人生早期の名前

自分という感覚が他者からの刺激によって発達し、ものには名前があるという認知の発達ともあいまって、子どもは、自分の呼び名が自分を表していることを次第に理解するようになる。他者からのネーミングは、太郎や花子という名前だけでなく、その人の特徴を表すような言葉であることもある。たとえば、「あなた～ね」という言葉である。この「～」には、「いい子」、「かわいい」、「すてき」、「全く遅いんだから」、「不器用」、「要領が悪い」などの言葉がはいるだろう。これらは早期の潜在的な名前として無意識の中に蓄えられ、気がつかないところでその人を支えたり、あるいは可能性を狭めたりしているのかもしれない。

このようなことが気になったので、授業の中で、「子どもの頃の愛称、あだ名、言われたこと、それが自分に与えた影響」という題で小さなレポートを課してみた。結果は、「その名前で呼ばれると親しみがわく」という肯定的なものもあれば、「嫌だった」、「腹が立つ」という否定的なものも見られた。興味深く思われたのは、どちらかといえば否定的なものの場合に、その影響は、それと対抗するようにでてくるということである。たとえば、「遅い、とろい」ということには「がんばらないといけない」、「おとなしい、静か」にたいしては「もっと動かなきゃ、よくしゃべるようになった」などである。抗原・抗体反応のようである。否定的なものであってもプラス面に生かしていると思われるところもある。しかしいずれにしても、そのことに大きくエネルギーがかかっていることは確かである。

カウンセリングのなかでも、この潜在的な名前がテーマになることがある。客観的に見れば十分に努力もして成功していても、何か足りない、さらに上を目指さなければと感じてしまう人もいる。また普通以上で

きていても、自分は駄目だと思いやすい人もいる。そんなときに何か気づいていない潜在的な名前があるのではないかと考えてみる。それが内側からその人を縛っていることがある。「あなたはしっかりした子だから、お姉さんだから」でやってきた人が、大学生になり、試験や就職を前にして疲れてしまったのか、もう頑張れないということもある。自分の中に自分の知らない、気が付いていない名前があるかもしれない。カウンセリングの話し合いの中でしていくのは、この自分の中の何かに名前をつけていく作業といえるかもしれない。

古くから日本には言葉にしたことは本当になるというような言霊信仰があって、言葉の持っている力には敬意が払われてきたようである。ここで取り上げたレポートの結果からも、改めて言葉の持つ力の大きさが感じられる。人生早期の名前は、それが潜在的なものになりやすいだけに、肯定的であって欲しいと思う。

IV. 名前を替える——言葉で装う

子どもの頃の名前は親や周囲の人がつける受け身的なものである。大人になるときにその名前を新しい名前に替えるという文化を持っている社会がたくさんある。成人式に、服装を替えるのと同様に名前を替えるという儀式が含まれているのである。日本では、武士の社会が持っていた、15歳の元服の時に幼名から元服名に替えるのがこれにあたる。装いを替えるのは、外側を替えることで内側の変化を、つまり子どもから大人への心の移行を助けるという機能がある。この名付けを川田（1987）は、「言葉で装う行為」と呼んでいる。

また川田（1987）は、成人したときに自分で自分に名前をつけるという文化を持つ、西アフリカのサバンナ地帯のモシ族の社会を紹介している。

そもそもモシ族の社会は、人名のための固有名詞がなく、名前はメッセージの役割を持っているという。たとえば、生まれてすぐつけられる名前は、“裸の名”というが、これは、ひとつには、子どもの生命を司っている精霊へのメッセージである。お母さんが妊婦の時に、間違えてひ

よこを踏みつぶしてしまったりしたら、子どもに“ニワトリ”とつけ、蛇の交尾を見てしまったりすれば、子どもに“コウビ”とつけたりする。そうしないと子どもが死んでしまうと考えられており、存命のための名づけである。大人になる前に早く亡くなってしまいやすい子どもを、何とか生きながらえるよう願っての習慣であろう。またふたつめには、生まれたときの状況から、“納屋”、“家の裏”というような命名もある。それから3つめは、人に対するメッセージで、「王様は私たちによくしてください」という意味の名前もある。その子の名前を呼ぶたびに周りがそれを聞くことを考えての命名で、ある意味では子どもの名を借りて言いたいことを言うわけである。モシの社会では年齢で区切られた成人式はなく、共同の農作業に出るときに、一つの世帯を代表して出る資格があると認められることが1人前ということで、このときに、成人名を自分で選んで持つようになる。この成人名は、耕作名、争い名といわれる。たとえば「石を煮ても湯気がでるだけだ」という名前があり、「俺は非常に頑固なので、どんなことをしても変わらない」という意味であるという。争い名というのは、潜在的な敵対者に対しての名前で、たとえば「骨は小蟻には運べない、あきらめるがよい」という名前があり、「自分は小物の手には負えない、大物だ」と現している。同じ名前はない。

注目したいのは、名前を自分で選ぶということである。非常に積極的な社会に対する自己主張である。日本では、名付け親を取ってその人に考えてもらうということは行われていたが、自分で自分の自己主張のための名前を選ぶということはなかった。自分でこのような意味のある名前を考えてつけることができるのは、自分はどんな人間かという内的なアイデンティティと深く関わり、自分で自分を定義づけていると言える。これは、現在の日本の長く間延びした青年期の中で、なかなかできないでいることである。

V. 自分という感覚—自我体験

自分という感覚は、生まれたときから漠然とあり、それが対人関係の

中で次第にはっきりしてくることはすでに述べたが、思春期の頃に、自分が自分であるということを強く意識する体験をすることがあるという。「自我体験」といわれているもので、「これが自分である」という経験であり、自分が一回きりのかけがいのない自分であり、誰も変わることのできない自分という存在であることを意識する体験といえる。「自分が自分自身であるという、内なる自己との出会い」であり、「自我の確立を示す良い例」であり、「精神的な思春期の始まり」であるという（西村、1978）。内容的には、身近な人の死や別れが呼び水となって自分という存在を強く意識したり、自分だけの部屋を持つようになって自分の内的世界に開かれていく経験をしたりとすることが多い。西村（1978）は、著名な作家や学者の自我体験をいくつか紹介しているが、典型的なものとして、ここでは土居健郎のものを引用してみたい。

「私自身数え年9歳の頃に起きた最初の自我意識の体験を思い出す。たしかある日、小学校からの帰り道のことだったと思うが、私は突如、自分というものは他の誰とも異なる存在であることを理解した。それは、何か電光のように私の幼い心を震撼したことを覚えている。私がどんなに努力したところで、自分と別の存在になることはできず、自分であることをやめることができないという痛切な自覚が、その瞬間私の心に誕生したのである」。

ああ、あのことかと、似たような経験をしたという人もいるかもしれない。強烈な体験になる人もいれば、いつの間にか通り抜けていた人もいるという。成人式に名前を変えるということが、子どもから大人への外からの移行だとすると、自我体験は、内側からの移行ということができる。

しかし、これは一方で危機でもある。西村（1978）は、「自我体験は自分が自分であるという体験であり、その裏には自分が自分でないというもう一つの世界が広がっている。したがって人は自我体験を意識すると

き、絶対的安定と絶対的不安の境界に立っているのである。どちらが見えているかによって体験の意義は異なる」と述べている。たった一人のかけがいのない存在の自分と意識することが、だから大切に生きようとなるか、その孤独さの恐怖におののくのかではずいぶん違ってくるだろう。自分になるということは、進歩であり、成長であるけれども、危機も含んでいる大変な作業である。

VI. 名前を失う

高齢者の再就職が難しいとか、リストラではないが早く定年を迎える人が多いということを聞く。これはアイデンティティとしての名前という観点から見るとどう見えるだろうか。いうまでもなく、職業アイデンティティの喪失である。何々会社の何々部長、何々大学の何々先生という名前を失うということである。若いときには、生き方や仕事を得る、つまり名前を持つということが大切なテーマとなるが、ある時期が来ると、名前を失うということがテーマになる。獲得できたところが、方向が逆になり、喪失が目立ってくる。必ずしも喪失という言葉はふさわしいものではないかもしれない。変化というべきなのだろう。しかし場合によっては、心理的に危機を迎えることもあるといわれている。岡本(1994)は、中年期の入り口にさしかかった男女の過半数が、1) 体力の衰えや体調の変化という身体感覚の変化、2) 時間的展望のせばまりと逆転 (= 死の側から自分の余命を考えること)、3) 仕事における限界感、4) 老いと死への不安という、否定的な自己意識を感じているという。そしてこれは、自分の生き方、あり方についての内省と問い直しを迫るものであるという。

『帰還—ゲド戦記最後の書』は、このような意味での中年期の危機という観点からも読むことができる児童文学であると思われる。児童文学が中年期をテーマにしていると読むのは、変な感じがするかもしれないが、昔話やグリム童話にも、中年期のことと思えるお話もあることを考えれば、おかしいことではないだろう。この物語は、大魔法使いのゲド

の物語の1巻から4巻あるうちの最後の4巻で、それまでの冒険や戦いのある話と比べるとずいぶん地味な話しになっている。物語は、全ての力を使い果たし魔法の力も失ったゲドが、故郷に帰ってくるところから始まる。そこには、もう一人の主人公とも言えるテナーという女性がいる。彼女は、女神の生まれ変わりとして神殿に育ち、のちにはゲドの師匠である魔法使いに育てられながらも、農夫と結婚し子どもを育て、夫は亡くなり未亡人となったという状況にある。ゲドもテナーも人生の段階では、ある段階を終えている。魔法使いという名前も、妻や母という名前も失っていると言える。ゲドは強かった偉大だったときとは打って変わり、何かにおびえているし、テナーは自分のしてこなかったことを考え、「男の力とは？女の力とは？」と自問している。この物語にはもう一人、子どもなのに全てを失ったテハヌという女の子が登場する。この子をめぐって様々な出来事が起き、物語はゲドとテナーの二人が共に生きる新しい方向に進み、一人の子どもの成長と将来を感じさせるところで終わっている。三人が新しい生き方を見いだすまでの物語ということができる。

職業の終わりや寿命が同じぐらいの長さであった時代であったなら、退職してからの、役割が終わってからのアイデンティティというようなことは問題にならないことだが、これからの時代はそういうわけにも行かない。ゲドとテナーは自分の役割が終わったあとに、一人の子どもを通して新たな生き方や方向性を見いだしたといえる。青年期には成人式という儀式があり、外側から心の移行を助けてくれるものがある。日本では成人式の本来の儀式としての意味はすたれて失われつつあるものの、就職や結婚ということをあたかも儀式のように、一つの節目として成長していく人は多い。それに比べると、職業の終わり、役割の終わりの中年期は、心理的には大きなことであるにも関わらず重要視はされていない。しかし、カウンセリングの場にそのようなテーマを抱えた人が訪れていることは報告されるようになってきている。心の移行に何らかの援助を必要としているといえるだろう。中年期にも、それぞれのテハヌを

見つけられるような儀式が必要なのではないだろうか。

VII. おわりに

自分自身になることは生涯つづいていくものであり、自分にしかできないことでもある。それには、すばらしさと同時に、重たさもある。「大人」というものになっていくにつれ、重たさのほうを強く感じるようになった気もする。人生では、この二つの間を絶えず揺れ動いていくものなのかもしれない。父親、母親という名前も、職業上の役職名も、「自分」がある時期に着ている服のようなもので、内側の変化に伴って着替えたり、あるいは着替えが先行して内側も変化したり、常に変わっていくものであるといえる。

引用・参考文献

川田順造「幼名と成人名」、『世界の子ども文化』岩田慶治編、創元社、1987

武藤隆他編『発達心理学入門』東京大学出版、1990

西村洲衛男「思春期の心理」、『思春期の精神病理と治療』中井久夫編、岩崎学術出版社、1978

岡本祐子「中年期のアイデンティティ」、『こころの科学』53、アイデンティティ、1994

Stern, D. "The Interpersonal World of Infant", Basic Books, 1985 (小此木啓吾 他訳『乳児の対人世界』岩崎学術出版社、1989)

鐘幹八郎「乳児期とアイデンティティ」、『こころの科学』53、アイデンティティ 1994

Ursula K. Le Guin, "TEHANU", Inter-Vivos Trust for the Le Guin Children, 1990

(清水真砂子訳『帰還 - ゲド戦記最後の書』1993)